

SADA

SAKAI DESIGN ASSOCIATION

堺デザイン協会

No.10

平成2年3月9日
創立5周年記念号



仁徳天皇陵

五年一昔

堺市制100周年記念事業事務局事務局長 明渡 利家

「南大阪は北にくらべ、文化果つるところ。」と悪口を云われて来た。新聞西国際空港ができるというのにめぼしい文化施設がない。重厚長大から軽薄短小の時代を経て、ソフト化社会へ移行しているのに大きく立ち遅れているというのだ。確かに、南大阪の中核都市といわれる堺でも、工業都市として「物を造る」都市力は抜群だが、「物を創り出す」方はいまいちの感がある。そのため、堺市は数年前から、工業都市オンリーのイメージチェンジをはかるため、「産業文化都市」づくりを指向、産業の高度化とソフト化を課題とするようになった。

そんなとき、偶々、川崎・岡村両氏から「堺で都市ソフト産業としてのデザイン業界を振興させたい。」との相談を受けた。早速、私も都市行政面から地域デザイナー集団の必要に賛同した。ただ、「大そうな目標をかかげても息切れして空中分解するのがおち。とにかく、市内在業、在勤、在住のデザイナーにできるだけ多く集まってもらって、お互いの懇親を深めたネットワークづくりに徹するのがベター。」という私見を申し上げた。

以来、両氏や関係者の努力で堺デザイン協会ができて5年。南大阪で初めての地域デザイナー集団としてメンバーも漸増と聞く。この間、行政ともC I（シティアイデンティティ）などの指導や、堺市制100周年記念事業に多くの協力をいただいた。また、「グッハランド'89大阪」では「サイエンス・ファンタジーの森」パビリオンの企画提案、「堺21世紀住宅フェア」では「相談コーナー」の出展などフォーマルな事業活動も積極的にすすめられている。

しかし、日本が世界一の金持国に。アメリカが借金国へ。昭和から平成へ。国会の与野党逆転現象。ついには激動時代のクライマックスとして、共産社会崩壊による世界対立から共棲へ…と次々に劇的变化をとげる現代、協会設立5周年はまさに五年一昔だといえる。

このような激動の1980年代後半を通じて、この協会が発展的に会運営を続けてこられたポイントは、実はインフォーマルなネットワークがうまく機能してきたからだと思う。

今後ますます社会価値観が流動化するほど文化への欲求が高まり、デザインなどをキーワードとした都市ソフト産業の関心が深まることは周知のとおりだが、価値観流動化社会では、むしろ人と人のダイレクトなコミュニケーションが大切な要素となるにちがいない。また、デザイン分野で発展途上にある南大阪地域では、堺デザイン協会の存在意義と可能性への期待が大きいといえる。

五周年によせて。

堺デザイン協会理事長 川崎 浩

五周年を迎えることができました。

昨年は '89デザインイヤーの年として、名古屋で世界デザイン博と会議が開かれました。21世紀に向けて将来予測されるデザイン主導型社会に対応して「新しい時代におけるデザインのあり方」を各層各分野で見直そうとするのがその運動の趣旨であり、博覧会ではテーマ「“ひと・夢・デザイン”都市が奏でるシンフォニー」とされ、工業化社会がもたらした機能性、利便性を基礎に人間の感性と情熱を開花させ、デザインの心をもって新たな人間・自然・技術の共存関係をつくりあげていくことを理念としました。また会議では「かたちの新風景・情報化時代のデザイン」をめぐる個々のモノのかたちを通じて、それらが集まってつくりあげる風景全体としてのモノの文化に視点が置かれています。

経済の国際化、産業構造の転換、人口の高齢化といった社会構造の変化に対して、新しい技術開発が相次ぎ、若い世代を中心とした生活様式の変貌が著しいものがあります。過剰なまでのモノの世界。その膨大なエネルギーを文化へ結晶させる仕事デザインであり、ありあまる可能性を現実にするうえで、今日ほどデザインの力を必要としている時代はありません。

私達協会は研究会、見学会等の会の事業を通じて、相互の交流親睦と研鑽を深めてまいりましたが、さらに各分野にひろがる会員一人一人の日々の仕事を通じて、また団体としては積極的に地域社会の産業経済の活性化と生活文化の向上にいささかなりとも寄与することを願ってやみません。



「堺デザイン協会創設準備のころ」

堺商工会議所 企画調査部

鈴木 隆夫

川崎浩氏と岡村荷氏等より堺市でデザイン関係に携わっている者達が、そのジャンルを越えて交流と研鑽によりデザインの向上を図るため堺デザイン協会（仮称）を設立したいので協力をしてほしい旨、会議所に来所され要請されました。我々もその趣旨に賛同し、堺市と共に協力することになりました。会議所からは小生がお世話の担当になりました。

発起人の皆様は、昼は自分の仕事を持っている方達でありましたので、会合は午後5時30分から浅野正道氏のお世話であかがねクラブ（松屋町2丁）で行うこととなり、会合は何ヶ月にもおよびました。

皆様方の話題は職業柄、芸術・文化・デザインの話題で、宣伝課に籍を置く桑原正嗣氏、工業デザインの森和雄氏、インテリアの山崎晶氏などは、話題のポスターや、TV・CMのお話が多く、上野あきら氏は芸術家ゼンとした服装をされており、デザインの知識が皆目ない小生など大変なところにお邪魔してしまったと後悔したこともありました。会則づくりについては、垣村三平氏をはじめ、金子誠之助氏、高木外氏、高木喬氏などの活発な発言により徐々に形をととのえて来ました。

会合の後、おそい夕食を皆でとり、紅一点の小田順子氏を囲み、お酒のいきおいもてつだい芸術論だけでなく、世間話には小生も仲間入りすることができました。

設立総会での乾杯は準備期間の苦勞を忘れ皆様と盃を交わしましたが、早や創立5周年記念を迎えることとなり、ご同慶に耐えません。

産業界における情報化、国際化、技術革新といった経済のソフト化の波は、今後もますます進展するものと考えられます。

経営資源としてのデザインの活用も活発化することは確実です。

堺デザイン協会のますますの発展を祈念いたします。

■表紙の周辺

仁徳天皇の墳墓。正しくは百舌鳥耳原中陵（もずのみみはらのなかのみさぎ）といい、俗に大山〈だいせん〉陵ともよばれる。全長480m、後円部の径245m、高さ35m、前方部の幅305m、高さ33mの前方後円分で、墳墓としては世界最大の規模である。墳丘は3段に築かれている。（ブリタニカ国際大百科事典より）

今年3月17日～19日とびしん南大阪では「世界巨大古墳国際会議」が開催される。

SADA 5年間の歩み

見学会

- S59. 7.13 ダイキン金岡工場
- S59.10.21 堺祭りを見る会
- S60. 3. 5 ミノルタカメラ堺工場
- S61. 7.26 地下鉄1号線中百舌鳥駅付近
- S61.10.17 株式会社大誓
- S62.11.14 堺の近代建築を見る
- H 1.10.25 村上数物株式会社

セミナーの開催

- S60. 1.19 堺21世紀の都市づくり／明渡利家氏
- S60. 3.11 堺の中世以降の街並みについて／福島雅蔵氏
- S61. 1.24 I F I 国際会議報告／川崎 S A D A 理事長
- S62. 1.31 堺副都心計画の概要／向井幸一氏
- S63. 1.22 私と花のかかわりあい／内山ゆり氏
- H 1. 2. 4 デザインをとりまく環境とデザイン行政の現状／水戸部洋一氏

SADA ニュースの発刊

- S59. 9. 9創刊号～S63.9.30No.9年2回発行 会員、賛助会員、関係官庁、友好団体に配布 印刷300部

イベント参加・協力

- S61. 5.17 日本展示学会堺大会に参加・協力
- S63. 8.26 奈良デザイン協会（NDA）との役員交歓会
- H1.12.5～12.11 住まいのまつりin堺に参加・協力
- H 1.11.15 デザイン開発指導連絡協議会に参加

審査員の派遣

- S60.3より毎年／堺の新製品フェア（協会賞）
- S60. 8. 1 第10回ゆかた祭り（協会賞）
- S60. 9.19 堺市農業祭シンボルマーク
- S60.11.12 南大阪地場産業振興センター愛称
- S61. 8.19 堺市中小企業振興会シンボルマーク&愛称
- S61.10.18 ファッショングランプリ（協会賞）
- S62. 8.18 堺市制100周年キャッチフレーズシンボルマーク・キャラクター
- S62. 1.17 堺市制100周年ワーキンググループの結成



わが国と西洋との交流史上、最も長い歴史を持つ日本とオランダの両国は、1989年、修好380周年を迎えた。

大阪では、大阪府、大阪市、堺市、財団法人21世紀協会、関西日蘭協会などが中心となって「オランダフェスティバル'89大阪」実行委員会を設立、全国一の規模で各種の記念事業を展開したが、そのメイン事業として「ときめく・ひと・とき・国際交流新時代」をテーマに、「ダッチラント'89大阪」を開催した。

会期：1989年3月19日～5月21日 64日間

会場：大仙公園 31ha

事業規模：15億円

目標50万人を掲げた来場者は4月29日に512,753人に達し、会期の3分の1を残して目標を達成するという快調ぶり、最終的に64日間の総入場者数は939,316人を記録した。1日平均14,677人。4月29日からのゴールデンウィーク9日間の入場者数は、27万人近くに及んだ。

以下はSADA3会員による「過去」「現在」「未来」の体験レポートです。

過去ゾーン 波濤万里をこえて

金子 誠之助

堺市博物館を会場に、「波濤万里を越えて—交流の歩み」をテーマに、日蘭交流の架け橋となり、そのシンボルといえる「テ・リーフデ号」の大型模型を中心に、5つのグループに分け、関連する資料の展示をし当時の堺とオランダとの関係の深さを現わしている。

●西洋との出会い

わが国における西洋世界との出会いは、種子島に漂着したポルトガル人に始まっているが、キリスト教の布教として宣教師の来訪、来日する人々により様々な文物がもたら



された。その中に世界図も含まれるが、日本もその図の中に登場するようになった。その当時の世界図、屏風が数多く展示され、長崎の出島図、オランダの医学図書などもあり、わが国にもたらされた貴重な品々が数多くみられた。

●蘭学物のはじめ

本格的な蘭学がわが国で広まってきて、天文、地理などの知識水準がたかまってくるさまが、地球儀、天地図説、望遠鏡、測量器具などの展示により推察できる。また医学書、語学書などもあり、洋画技法も導入され、浮世絵師葛飾北斎画の江戸八景もあり、遠近法や陰影法を活用した版画集として展示されていた。

●開けゆく日本

日本は鎖国政策を敷いていたが、世界情勢の中では合わない状況になりつつあることを、オランダ国王から知られるがなかなかその方向には進めなかった。だが国防などに力を入れ、新しい技術の導入、海軍伝習所の開設、医学伝習機関の設置、理化学教育の促進をオランダの指導により進め、開国への道へと進んでいった。理化学教育は、のちに開校された理化学校だった「舎密局」に進んでいった。「舎密局」の模型が今回追加公開されたが、この製作にはSADA会員岡村デザインプロで制作された。

●日本再発見

鎖国政策下のわが国の文物が、オランダにもたらされ、特に美術工芸品や生活用具が海を渡った。その中で伊万里焼が輸出され好評を博し、ヨーロッパでは美術工芸品が愛好され、ジャポニスム（日本趣味）が流行し、浮世絵の技法を吸収したファン・ゴッホの絵にも現れていた。伊万里焼のすばらしい作品とゴッホの浮世絵調の絵などが展示されていた。

●オランダ船図説

オランダとの交流の元になった「テ・リーフデ号」の模型を中心に、船の模型が出品されていた。

●レンブラントとオランダ絵画

光の魔術師といわれるレンブラントの「キリストの胸像」を中心に、ハーグ市立博物館に収められている、アブラム・ブレディウス博士のコレクションの1部50点が展示され、17世紀オランダ絵画のすばらしさが、堺の地にて見る



ことができたことは、素晴らしいことであった。またこの展覧会に和泉市久保惣記念美術館より、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの「動く」、「紡ぐ」、「織る」の3点が同時出展されていたことは、数は少なかったが内容を盛り上げたのではないと思われる。

以上のように、オランダと堺を中心にした日本との交流は380周年を迎え、日本の開国に大きな役割を果たしたオランダとの歴史的なつながりは大切であり、今後の国際交流にこの「ダッハランド'89大阪」が開かれたことは、大変意味深いことであったと思われる。

現在ゾーン そのまんまオランダ広場

古本 和宏

●街ごと、人ごと、オランダがやってきた!

「そのまんまオランダ」と呼ばれるこの広場は、オランダの街並みのイメージを文字通り再現します…と、宣伝された。広大な大仙公園で御陵通りに一番近い現在ゾーン。ゾーンの改札口を入った広場の右と左に、ロッテルダム市館とオランダEVD(貿易庁)のパビリオンがオランダ官庁然としたクラシックスタイルと総ガラス張りの超モダンスタイルで対照的に向かい合って、ロッテルダム市の昨日、今日、明日のガイドと素晴らしいオランダ・インテリアの数々を展示。改札口から正面、広場の中心に、春風を受けて回るオランダ情緒の“大風車”が見える。その手前にイベント用の屋外ステージ、大風車を軸に広場の周辺に、ロッテルダム館の脇から14軒のオランダ・ビレッジが半円形に軒を連ねて“祭りの屋台”風だが、ファサードにオランダの街並をイメージした書き割りで一軒一軒の個性を表し、楽しくオランダの特産品がショッピングできる。その向かいでは「ネーデルランド」の直営ショップがオランダの特産品をいっぱい並べて購買意欲をかきたてる。(特産品めあてに数回通った主婦もあるとか…) その隣りはハイネケン「カフェ・ピッパー」で、オランダの味と自慢のビールがでる。簡素なインテリアではあるが、オランダのムードを上手に演出できており、“食堂がもっとほしい…”と思われたダッハランドの中で特に中高年の客にとっては、“ほっ”とできるスペースであったようだ。広場内で独立して点在した「木



靴の店」・「ダイヤモンド・ショップ」では木靴づくりの名手の実演と販売、ダイヤモンドの研磨と実演、販売をしており、オランダの職人気質に直接に接することができる。クイズや抽選でダイヤモンド(0.2カラットのペンダントが毎日1名に)、ミニ木靴、チーズ、ビールなどオランダの特産品のプレゼントにも人気があったようだ。

●オランダの若者たち、熱い友情の心を運んで!

パビリオンや広場のあちこちで、日本を勉強中のオランダ人大学生の男女26名が、コンパニオンとしてサービスに走り廻っており、民族衣装のオランダ人は人形みたいで、エキゾチックなムードを一層に盛りあげ、片言の日本語での対応が、国際交流の感情をチョッピリ刺激し、若者たちの心を引きつけたようだ。

●大道芸人たちがやって来た!

現在、オランダで活躍中の大道芸人(パフォーマー)の四組、★フライング・ダッチマン(若き曲芸の名コンビで3m近い一輪車の上で、2人が“火棒の曲芸”を披露)★ミュージック・モービル(古い鉄製の石炭ストーブを改造した20種の楽器をセットして、同時にいくつもの楽器を演奏する“ワンマン・オーケストラ”のパフォーマンス)★スリーオブ・カインド(3人トリオが、おもしろおかしく絶妙のコミック・ミュージカルを演じ、昔なつかしい名曲の数々を聴かせた)★ミスター&ミセス・ジョーンズ(コメディ、道化、曲芸)を招待し、イベント広場や屋外ステージで、会期中の64日間、その妙技を披露してくれた。

未来ゾーン ファンタラマプラザ

森 達男

さて、さわやかな5月の空気に新緑の若葉がまぶしく照り返っている木立と、会場一杯に色とりどりの花をあしらったエントランスに、未来ゾーンがまるで林の中に宇宙船が着陸したように設置され、その廻りをめぐらしているネットは、宇宙船のバリアであろうか?

宇宙船は21世紀へ広がる科学の夢、人類の夢、不可能を可能にしていく不思議な科学の世界を、サイエンス、ファンタジーの楽しい広場として日蘭両国の最先端技術を織りまぜて展開する未来ゾーンです。



この宇宙船の正面には、日本とオランダの架け橋となった「デ、リーフデ（愛）号」が紋章の様に雄姿を見せています。このエントランスホール（船内）では「マルチ・スライド・システム」による臨場感あふれる映像体験が出来ました。

9台のスライドプロジェクターを駆使して広げる映像は「ときめく、ひと、とき国際交流新時代」の基本テーマにふさわしく、シャープな音楽をともなって、「愛」「海と大地」「空、未来へ」の3つの構成で展開し、色々な地域開発振興の将来像が印象強く感じられました。

続いて、ダッハコミュニケーション、スクエアでは64日間の会期中、会場とオランダとを8時間の時差をこえて、リアルタイムで結ぶもので、国際化時代の旗手となる最新通信技術を駆使して展開する「進化するコミュニケーション」の実験です。この企画は日蘭両国の関係団体の全面的な協力を実現するようになったもので、この種のフェスティバルで試みられるのは、我国初のことだそうです。

オランダVTR「オランダの素顔」の放映で、ロッテルダム市の風景が出て来ましたが、市民がデザインコンペに応募して採用された種々の市内電車は美しく、日本の広告だらけのバス、電車と比べ楽しい街の空間作りをしていました。

企業展示館コーナーでは、各々の企業が未来の発展の工夫をこらした特色ある展示がみうけられました。

しかし、未来ゾーンは地場産業や全国的な企業の未来像をあまり知ることが出来ません。フェスティバルは、或る意味ではコミュニケーションですから、一般の生活で普通見たり、ふれたりすることが出来ない商品の展示をすれば、もっと民間企業の積極的参加があり、一層の盛り上がりがあったのではないかと思います。

また、必要だから物を買う時代から豊かな生活を楽しむために物を買う時代へと消費者の購買パターンが変わっている様に、イベントでライフスタイルの提案をしたり、遊び空間の演出情報を提供する流通サービス業界の参加も可能であったと思われます。未来の生活風景の中に科学技術の未来イメージといった手法を、単なる子供の驚きや物めずらしさと異なる提案があっても良かったと思います。

企業にとって単なる販促上の戦術だけでなく、経営の根幹にかかわる戦略として位置づけられるような参加をして欲しいと思います。

科学、文化、産業の未来は不明で予測は不可能に近い。しかしながら、コミュニケーションの発達、特に国際交流は盛んになるでしょう。

オランダ人は昔（17世紀初め）15,784kmもの離れた地球の反対側から1年余りの年月をかけて、ヨーロッパのさまざまな文化、芸術、科学を運んできました。

現在、わずか10時間足らずでオランダに行けますが、今の日本のオランダとの交流を考えてみますと、かつてオランダ人が行った熱意から比べるとロマンの欠除が感じられます。

国際交流することによって色々な未来像を確固なものにし、未来をデザインの戦略的キーワードにすることが今後のデザイン発展につながると思います。現状解決形のデザイナーで終わることなく、スタンスを上げ未来の映像と感性を持ち合わせるよう心掛けたいと思います。

ダッハらんど'89大阪 企画のうら話し

岡村 篤

昭和64年堺市制100周年記念の年は日本の国にとっても平成元年と年号が改められた記念の年としてスタートした。振り返れば堺は中世に南蛮貿易で栄えた町である。オランダとの縁も浅からぬものがある。堺とオランダを結ぶものは歴史の事実の中にいっぱいあることがこれを機に改めてわかったその催しが、くしくも仁徳陵の正面で行われるのは何か細い糸なのかもしれない。何しろ堺市が本格的な国際イベントと取り組むのはこれが始めてとあって、100周年の企画として立案されているものの、どのような具体策を創り上げていけばよいのか、前後を眺めれば奈良シルクロード博、後には花博と大イベントの狭間にあり、イベント食傷気味の観客を限られた予算と期間のうちにどれだけ動員出来るのか、全く予想だに出来ないものであった。まして主催者としては赤字決算など出来ないだろう。

先ず入場券200枚購入の依頼が来た。何故200枚なのかとの批判もあったが、お金の協力こそいささかかなりの出来る協力だ。堺デザイン協会会員から100周年プロジェクトづく



オランダから見た「ダッハらんど'89大阪」

「オランダフェスティバル'89大阪」実行委員会発行「オランダフェスティバル'89大阪」公式記録集より

オランダ外務省 M.M.スモルハンゲ

1989年6月15日、オランダ外務省で「オランダフェスティバル'89大阪」全般、特に「ダッハらんど'89大阪」についての評価ミーティングが開かれた。出席者は「ダッハらんど」を肯定的に評価した。来場者数は、驚くべき多数にのぼり、オランダ側から出展、出店した参加者の多大の投資を正当化して余りあるものであった。

未来ゾーン：注目を集めるという意味では良いものであった。非常にダイナミックではあったが、内容的にいまひとつ、まとまりがなかった。オランダ企業関係の展示は見劣りし、未来ゾーン全体との調和がとれていなかった。

過去ゾーン：出席者全員が、堺市博物館を大変美しい所であると一致した。日蘭の歴史的関係をテーマとしたプレティウス・コレクションも大変うまく組織され、これら文化的要素は「ダッハらんど」全体をバランスのとれた多面的なものとし、フェスティバル全般の起点を深く掘り下げる意義深いものであった。

現在ゾーン：オランダ製品販売の促進にとってすばらしい機会を提供してくれ、ライデン大学、エラスムス大学の学生達が活躍する場となった。日本の市民向け品物の販売は大成功であった。(農水省の各店舗あたり1日の平均売上は8,000~10,000ギルダー=50万円~63万円にのぼった。)

結論：全参加者が大いに満足している。全体コンセプト、バラエティーの豊かさ、各ゾーンの十分な広さ、日本側の非常に有能な運営、あらゆる層の入場者に対して、オランダという国そのものや、オランダの製品、サービスへの注意を喚起できたという点も高く評価された。開催前と、開催中におけるパブリシティも、非常に高く評価されるべきものであった。

問題点をあげるとすれば、土地の特殊な条件による規制と、オランダ側の参加準備期間における、いくらか厳しいともいえる日本の実行委員会側の姿勢があげられた。

りを呼びかけたところ、上野富美子、岡本安吉、崎田公明、古本和宏、岡村筈が参加した。前年昭和63年3月に全国から募集したイベントのマスコットキャラクター審査会にはプロジェクトのメンバーとして、崎田、岡村が参加して旧朝日新聞ビルで行われ、「ダッハ」=こんにちわの手を表わした20才OLの可愛いデザインキャラクターが選定された。64年11月になってから、ようやく100周年記念事業事務局から堺のブースを協力しないかとの話があり、早速プロジェクトのメンバーに呼びかけて、説明をきいた。翌3月開幕まで三ヶ月余と、この事点でプランは何も決まっていない。SADAとして何が出来るだろうか、広告代理店、施工業者は決まっている。この時間の遅れを今我々が背負い込むことは出来ないが、せめてアイデアを提供することでお手伝い出来る。古本、岡村が会議に参加して意見を述べ、入口らしいものを見つけることが出来た。もう二ヶ月早ければと悔やまれる。

期を同じくして大阪市でも国際交流会館に於いて「大阪とオランダ展」が開催され、永年の宿願であった舎密局の製作、出展が行われた。堺でもダッハランドの過去ゾーン会場に展示されたが、この製作を担当させてもらった事から、日本の学問の基礎を築いたオランダの化学や医学が今の大阪大学の礎となり綿々と続いていることを知った。当時のオランダ教師ハラタス先生の愛弟子から数えて四代目の村橋俊一大阪大学基礎工学教授が、何と私の小学時代の同級生であった事が判った。この舎密局の復元模型は大阪市立博物館で永久保存されることとなった。

平成元年3月19日openして、当初心配された入場者も日増しに記録を伸ばし、最終日には大きく目標を上回る成功を納めたのは大変うれしいことである。終わってしまえばゴミの山、どちらも同じ事情のようだが、これ程多勢の人が踏み荒らした芝生の修復がまた大変だったようだ。100周年記念の年も終わり、あとは世界古墳会議を残すのみとなったが、記念行事の企画はそれぞれ21世紀へ向けてのスタートであると位置づけているように、堺デザイン協会SADAも、それなりに努力はしたものの、公式記録の何処にも名前が出てこないのは、まだまだ会としての努力の足りないところと心に命じたい。

 西方見聞録抄

館野 羊一

●はじめに—その1

コロンブスにより発見された新大陸は、本当なら『コロンビア大陸』といわれるべきであろう。それが『アメリカ大陸』であり、今やアメリカ合衆国といわれている。

1492年8月、コロンブスはスペインのバロス港を出航し、インドを経てジバングをも目ざしたのではないか。地球の直径を計算しきれず、インドまでを海路5,680kmと見積もった。実際は18,826kmである。スペインを出帆し、だいたいの彼の計算どおりの所にインドと思ったが新大陸があったわけである。

●はじめに—その2

トルティージャをご存知ですか。今や有名なスペインオムレット、それがトルティージャです。別名スペインの丸い金貨とも呼ばれ、街角のバルで、家族で愛されつづけてきた料理である。新大陸をめざした時代、メキシコの地でみつけられたトウモロコシで作られた丸いパン。それはトルティーヤ・ミス。そのパンにヒントを得て生まれたといわれるトルティージャ。

もう一つ、バエジャをご存知ですか。ピレネー山脈から先は田舎だ、といわれたスペイン。知らなかったのだが、スペインはヨーロッパの米の産出国だという。その米をスペインにもたらしたのは古くイスラム人であるという。この米は温暖なバレンシア地方

大地下空間が完成し、一区切りのオープンの日に行った。しかしミッテラン大統領がくるというので厳重な警戒である。自動小銃を持った兵士風がピラミッドエントランスをかこみ、かつゲリラ防止のため大統領の来場時間も秘密という。予定を変更しその日はオルセー美術館へとセーヌ川を渡ることにした。翌日1時間も長蛇の列にならび、ピラミッドの広場を一周してその地下エントランスに入った。ルーブル美術館ははじめての訪問である。いやヨーロッパそのものが初めての訪問であり、この年まで……と、はずかしいものである。

I 大阪ベイエリア開発計画が色々と話題を提供している。関西新空港も一つの核だが、広く和歌山エリアから大阪、堺、兵庫エリアに至る広大な地域は、まだまだ開発の余地があるといえる。21世紀に役の立つ開発を、有機的に考えるべきとかねがね思っていた。やたら四全総志向による特にリゾート法に目先をうばわれたリゾート開発だけでなく、大阪にない「のほほん」としたゆとりのある開発をしたいものだと思う。

今年大阪湾にコロンブスの船「サンタマリア号」(仮称)を浮かべることになった。大阪湾マーケットプレイス発の遊覧船である。大阪水上バス線が建造する。そのインテリアを担当することとなった。

一方、そのマーケットプレイスは一大ショッピングセンターである。世界第一級の水族館と天保山地区の再開発を

思っていたのはフランス、イギリス、イタリアの「様式」の勉強を第一に意識していたからである。しかしコロンブスが私をスペインに招いてくれた。

1992年はスペインでは話題が豊富である。日本では二つの巨大イベントが話題になっているけれども、正確には四つあると思う。詳しくは知らないが、一つはヨーロッパでのEC統合にむけてのスペイン経済発展への努力とその統合へのリーダーシップ意欲向上という国をあげての活気である。スペインのエリートはシエスタという昼寝なんかには縁なく、精力的に働いていると聞いた。

二つ目は同年セビーリヤで行なわれる万国博覧会である。花の万博のあとを受けてセビーリヤ郊外の河川敷でおこなわれる。その会場予定地を見ることができたが、今は看板一枚が立っていた。

三つ目がコロンブス新大陸発見500周年の記念行事であり、スペイン各地で色々な催しが計画されているそうである。イタリアジェノバ生まれの一船乗りが各国で自分のプランを採用されず、いわば流れついたスペインで7年間ほど待ち、1492年やっと当時内乱のおさまったスペインイザベラ女王に援助をもらいインド、ジパングをみざしてカシス湾に船出したのである。

四つ目がバルセロナオリンピックである。バルセロナのモンジュークの丘の隣りに、磯崎新設計の巨大アーチドームが上ったばかりの所へ訪れることができた。付近はスペイン村（日本の明治村の様な古い建築村）があり、ミロの美術館があり、モンジュークの砦には、スペイン内乱の武器を集めた軍事博物館もある。丘から遠くみわたせば、コロン広場とサンタマリア号のレプリカ、左に目をやるとあのガウディーのサクラダファミリア教会が遠望できる。

オリンピックは、この丘にあるスタジアムを手直して開会式を行い、ドームは屋内競技場として新設、磯崎氏による設計が採用されたのだそうだ。スペインは92年におおいにフィーバーするだろう。

古くはイスラム人によりアフリカから浸入され、ヨーロッパからのキリスト教との長い内乱時代。グラナダでの激戦を終え、コロンブスが出航できた。それ以後は世界中に勢力を持ち、富をスペインに持ちかえった。植民地では先

住民との悲劇も多かったが、スペインには文化がまた栄えヨーロッパとは異なる文化が出来上がった。いま日本は世界中に活躍している。時代はかわってもややスペインの世界開拓時代に似ている所はないだろうか。少し反省をすべきだという発展中の日本である。



「バラドール・ナショナル・コンデ・デ・オルガス」のロビー

III 本誌の貴重な誌面をかりているのにインテリアの話をしないのは失礼と思うので「スバニッシュ」について一言したい。私達の先輩はよく様式として「スペイン調」を好んだものである。現にスバニッシュでまとめられたいいインテリア作品が我が社にも記録として残っている。しかし実際にスペイン各地をまわってみてかえって混乱したのが実感である。私が思っていた通りのスバニッシュインテリアは、一つ、トレドを見下ろす国民宿舎のロビー、ダイニングにみられた。また、トレドの中のエルグレコの家もそうである。白壁仕上げの石ずみ壁に載っただけの梁。それに板床をはっての二階空間の下があのスバニッシュ空間の一階となる。見てまわっただけの今回、どうも分析できずにいるが、民家風空間にいわゆるスバニッシュをみることができた。たしかに宗教空間ではあるラミダ修道院（パロス）にもその空間があったが、やはり民家的な建物である。なぜなら大きく三つに分けてスペイン建築を見てみるとわかると思う。一つはキリスト教建築である。宗教建築のうち、大聖堂や、ヒエルダの塔のようなものはなんとなくおしなべてヨーロッパ各地のものと共通するのではない。次に王宮といわれる建築群。支配者階級が住むあるいは政治を行なったものはやはりベルサイユ宮などと同様、様式装飾過剰で、権力の誇示の空間である。三つ目が風土

与条件から出来た民家風建築群であろう。パティオという中庭をだき、太陽光を好みにあわせて弱めてとりいれている。まさに光と影のコントラストである。スペイン滞在中とくにトレド、セビリア、バロスではブルスカイを体験した。日本の四季の空はグレースカイであるが、パティオには青空からの強い日射しが美しく調和する。白壁に茶黒の木梁。むく木を使った素朴な飾りだけの家具そしてマントルピースを大きくとる。そのまわりに手書きタイルをはめこみ心やすらぐ空間が先輩達が好んだスパニッシュであろう。



マドリット「ホテル リッツのロビー」

おわりに

旅の終わりは、勉強のはじまりと思う。スペイン各地を今回のプロジェクトのためまわったが、自分の不勉強さをさらに思い知らされたのが実感である。ジェノバ生まれのマルコポーロが中国・インドなど当時のヨーロッパからみて未知の見聞録をまとめたのが1100年代と聞く。地球が丸いという概念はそれより以前からあった。コロンブスはインドに行くつもりでアメリカ大陸を発見した。発見した価値は国家に富を与えたが、彼は単なる偉大な冒険者であった。航路開拓が目的であった彼は死ぬまでインドと思って不遇のうちにスペインで死ぬ。アメリゴヴェスプッチによりアメリカ大陸という名をとられ、国家は新大陸で富をうばってスペインの繁栄の時代があった。その後イギリスが世界の海を征服しオーストラリア大陸などを発見する。日本はスペインの隣国ポルトガルにより西欧を知り新大陸国家アメリカにより鎖国を解かれる。遠くはなれていた日本ではあるがコロンブス新大陸発見500周年は大航海時代を経

て日本に西欧文化がやってくる時の流れと、先人の冒険の事を思っ、何か祝ってもいいのではないだろうか。

帰国してスペインの食文化も調べてみたが、新大陸の発見による食文化の交流もあったと気づいた。セビーリアでみたシガホテルチェーンの「アルフォンソ13世ホテル」は驚異のインテリアを持つ。南部スペインのデザインの凝縮である。スペインの光と影は色々な分野にいえる。さらに勉強したい。パリはもう一度訪れてからと思っている。

中国89/90秋冬服装流行趨勢に参加して。

桂 智子

北京、南京など中国の十大都市で、3月15日に一斉に、秋冬ニューモードのファッションショーが展開されました。桂学園では、上海市服装会社の招待を受け、30点の作品を携えて、生徒達代表六名が、中国をあげてのこの行事に参加してまいりました。

中国古代の歴史と伝統文化を偲ばせる、大陸的造りの壮大会場で、よく訓練された中国人のプロモデル達によって、2回の公演が、熱烈な歓迎のもと、超満員の中国人が熱心みつめるなか、無事行われました。

中国、特に上海の人々のファッションに対する興味と期待は大きく、パンツ中心の中国ファッションから、スカートにハイヒール、手にはハンドバッグと大きく変わりつつあるようです。しかし、冬物のウールのコートが、市民の3ヶ月分の給料にも相当するようでは、おしゃれなファッションなど、まだまだ、あこがれではあるようですが……。

中国の女性達が、お化粧をし、パーマをかけ、飾らなくても、四季おりおりの洋服を着れるように、遠からず、その日がおとずれることを念じてやみません。

日本を出発するまでは、いろいろと大変心配でしたが、上海に着きましたら、まずホテルにモデル全員を集合させて下さり、入念に衣裳合わせが出来ました。そして、当日は、舞台で、リハーサルも、音合わせも出来ました。ただ驚いたことに、楽屋には、モデルの他は、モデル組合のボスのおばさんが1人、進行係をつとめるだけで、衣裳係やフィッターは1人も居ず、モデルが自分で、自分の着る衣裳を管理し、自分ひとりで着替えをし、淡々と自分の

仕事をこなしているという風で、大勢がごった返す日本の楽屋とは大いに違っており、プロフェッショナルなモデル達に感心致しました。

日本人との国民性の違いだと思いますが、楽屋の一部屋にアイロンがけの準備をしてくれたアイロン係の数人の男性は、自分の仕事以外は、何も知らないよといった様子で他の部署には目もくれず、ただじっとそこに居るという有様で、ここらあたりが、“中国人は、なまけ者”と受けとられてしまうのではないのでしょうか。

ともあれ、今回の中国訪問は、服装公司の方々に大変な款待を受け、一流ホテル（上海大厦）での宿泊、毎晩乾杯、乾杯のフルコースの珍しい中国料理、そして、蘇州から杭州への旅行、全てが、完璧な接待だったこと、感謝の気持ちでいっぱいです。日中の専門学校間との交流と、日中文化の交流は、新関西国際空港の開業と共に堺の若者達に、大きな自信と、世界へ向ける心の目を与えてくれることでしょう。



デジタル随想

岡本安吉

泉州生まれの自分は堺が好きだ。人も街も、その気性も、荒削りで、率直で一本気。京都、大阪人とも、どこか違う。エリート意識が強く、気位ばかり高く、何か事を興す時には引っ込み思案で人の目を気にするのはどういうわけだろう。自分は大阪市内から数年前、堺にスタジオを移し、どっぶり堺を考えることがしばしば有る。それにしても最近の堺の沈滞ぶりは、いったいなんだらう。新しい店舗が次々にオープンするや、いつのまにかシャッ

ターが何日も閉ざされている。ついには閉店。その繰り返しが目につく。少年の頃、大浜の海で首までつかって足で“はまぐり”をいくつもとったこともある。その海岸は無秩序な工業化で海岸線をコンクリートと、石油タンクからなる無機質な塊がたち並び、海水が汚れ、そこから吐きだされるガスが鼻を突く。



かって芦屋と並び評せられた

緑の多い住宅街も1軒1軒、歯の抜けたように取り壊され、そのあとに、あたりとはマッチしないコンクリートの建物がたち、これまでの住人は潮が引くようにたち去っていく。我々の先輩たちが中世に命がけで築いた自由都市、堺「黄金の日々」で名を馳せた豪商たち、商人を中心に茶道をはじめ、高い文化が開花した。その精神とエネルギーは、いったいどこへいったのだろうか。二次大戦の戦火の中で、焼きつくされてしまったのだろうか。立派な歴史・文化を持ちながら、そのゆかりの地、史跡などの保存も満足とはいえない。巨大なビル建築や道路のかけになる前に公共の手で保護ができないものだろうか。またその文化活動なども耳にしな。新人育成のために与謝野晶子文学賞などもあって良いのではなからうか。

関西新空港をはじめ、関西学研都市計画など21世紀に向かってのビッグプロジェクトの数々を、我々堺人はこの機会に考えるべきではないだろうか。旧堺市内の道路整備はすばらしく、どこの都市にも例をみない。しかしその周囲の衛星都市へのつながりがなく、南北の河川には橋が少なく、東は依然として旧街道のままのこされておられ、毎日の交通停滞は大きな産業のロス生み、堺市内は袋小路においやっている。インテルサットで堺を上から見れば、そのすがたは、あたかも「ねぎ畑に置かれた将棋盤」のようだが、今の堺は決して「高速道路のあいだに置きざりにされた将棋盤」であってはならないはず。

 企業が創る

“輝き感を豊かに再現”

「フジカラー ハイメタリックプリント」

㈱フジカラーサービス

カラーペーパーに金属薄膜層を組み入れた新タイプの高輝度カラーペーパー「フジカラー ハイメタリックプリント」を発売しました。世界で初めて、感光乳剤層と支持体との間に光反射の効果を増大する五層の金属層を組み入れたことにより、カラープリントの輝度・彩度・立体感・シャープネスが大巾に向上。コマース写真・ディスプレイフォトの制作において、貴金属や自動車等の“光もの”をよりリアルに再現する他、風景・人物・夜景等を“輝き感”豊かに表現できる。



 ズームアップ



南蛮壁画

岸本 隆雄

昨年4月大小路シンボルロードのモニュメントとして市小学校のブロック塀に有田焼きの陶板壁画がお目見えした。

壁画は三面構成で、幅50.5m、高さ2m。堺の海外貿易をテーマに、堺市博物館所蔵の南蛮屏風や神戸市立博物館所蔵の世界地図屏風などから題材をとり、「南蛮船」「世界地図」「遠明船」など当時の文物を描いている。また壁画の下には、海を象徴した波模様の青色陶板も埋め込まれている。

工事費3,500万円。

デザインは、佐賀県武雄市のデザイナー・古屋伸治さん、山下智樹さん、古志忠男さん、中野澄子さんの共同作品。昭和62年度に一般公開されたもので、応募総数195点。うち絵による表現が158点、文章による表現が37点。約8割が小学生と高校生からの応募だったという。

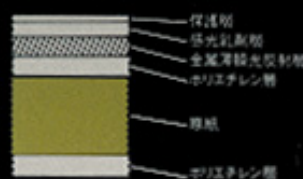
ユニークなストリートギャラリーとして行き交う人々の目をたのしませている。


FUJICOLOR Hi-METALLIC PRINT

世界初「輝き感」を再現する
フジカラーハイメタリックプリント

- 「輝き感」をリアルに再現
メタリックな被写体、夜景、晴天下・逆光下での風景、人物など「輝き感」の表現に最適
- 抜群のシャープネス・立体感
繊細な絵柄・文字も浮き立つ様に描写
- 銘板や説明パネルに
スミ文字・色文字・写真との組み合わせも自由
- 際立つ演出効果
指向性のある輝きや質感再現されるメタリックベースは演出効果抜群

●輝き感を再現する
カラーペーパーの層構成



 フジカラーサービス

五反田コマースナル課 ☎(03) 403-8711(代) 山形営業所 ☎(0256) 43-8815(代) 広島営業所 ☎(082) 730-0280(代)
 大塚コマースナル課 ☎(03) 524-0481(代) 名古屋営業所 ☎(022) 913-4111(代) 福岡営業所 ☎(092) 541-0731(代)
 札幌営業所 ☎(011) 811-4184(代) 豊橋営業所 ☎(0532) 53-4300(代) 北九州営業所 ☎(093) 561-1128(代)
 仙台営業所 ☎(022) 258-8148(代) 京都営業所 ☎(075) 311-2200(代)

堺・今・昔

線香

老 健一

油照りの午後、とある祠の傍らを通ったとき、スーッと涼風が渡って行ったように思った。立ち止まって涼しい風元を探ると、お祀りしてある仏様に線香が供えられていました。線香の薫りの涼しさを始めて体験しました。堺は線香が始めて生産された地として、現代国内生産の20%を占めています。堺に線香の生産技術が入るのは「天正の頃・1573～92」宿屋町大道の薬種商、小西弥十郎が渡韓して学び、これを広めたという説が一般的であります。

線香の原料である香木は、インド、タイなど東南アジア諸国の白檀、沈香、丁字などの樹脂、樹皮、根、葉、花などを乾かして粉末にし、松脂などを糊料として練り、線状治具から押し出し、乾燥して作るが、仏教国の東南アジアの炎熱下、仏恩に感謝して線香をお供えして、涼味を奉ろうという心から生まれたものであろうか。

平安貴族が衣服に香料をたきこめた話しは、源氏物語に出てくるが、雅び生きる香りをまとい相手に涼味を感じとって欲しい念からであろう。これを現代生活の潤いとして、インテリアに生かすようにしたら如何、あるいは匂袋を現代化して、ポケットサイズの線香を作り、香りを愉しむ今様「薫物」があってもよいのではないか。人工香料が各種出廻っているが、天然香料とは格段の差がある。



“市内線香製造工場” 太田健一画 堺観光協会刊

E-スポット

LA CASA—ワインとイタリア家庭料理の店— 桑原 正嗣

一条通りから中央環状線を東に上って料亭〈かき豊〉の角に入ると、そこはもう閑静な住宅街。〈LA CASA〉は、〈パラッツォ安藤〉の一階に身を潜めるちょっとお洒落なイタリア料理の店。いつも厨房に立つ久松シェフは、イタリア各地で数年間修業を積んだなかなかのグレモノである。

コースは当然、アンティパストとの出会いからはじまる。オリーブオイルとヴィネガーの絶妙なハーモニーが新鮮な魚貝類の味を引き締め、ヴェローナ近くで産するソアーヴェの白ワインは乾いたノドをヒンヤリとすり抜ける。パスタも楽しみだ。スパゲッティの基本、バジリコとトマトソースのシンプルな一品と、手打麺にサモンクリームをからめたものを取り分ける。

魚料理はその日の仕入れによって変わるが、この夜は活オマールのグリルが登板した。殻の周囲がうす赤く、中心部は半透明で頃合いの焼加減。香草とオリーブオイルの



おりが鼻孔をくすぐる。肉はやはり仔牛だった。モッツァレラチーズを挟んだかの一皿で、ソースとの調和もよく舌がモツレルほどの出来だ。デザートのココナツと苺のムースも自家製で、抑えた甘味がしめくりりにふさわしかった。

ワインはイタリア各地の吟味されたものが揃っており、ナスのグラタン、イワシのフリッター、きのこのリゾットなどカジュアルな小品を相手に飲むのもまたよい。

月曜休み。電話で予約の方が安全だろう。(TEL28-5475)

SADA平成元年節分懇親の集い

例年であれば1月に新春の集いを開催するが、昨年は昭和天皇が崩御され、年号も昭和から平成と改められたので節分の日を新しい年の始まりとして、節分の集いをホテル・リバティープラザで開催した。

当日は大阪府商工部ソフト産業振興課、水戸部主幹のお話と、桂智子会員からファッションショーの報告、小田順子会員からは新しく開校した神戸芸術工科大学のキャリアムの紹介があった。賛助会員も多数出席され、和気あいあいのうちに時間が過ぎ、今年1年の各会員の活躍を祈りつつ8時過ぎ散会した。

■ソフト産業振興課、水戸部主幹の講和要旨

平成元年11月1日より5日まで、マイドーム大阪にて「伝統的工芸品月間国民会議」が開催される。堺市に於いても堺市制100周年記念事業の1つとしてこの催しに参加、特に堺市としては日本に誇る「堺の打刃物」を現在の生活の中でどう取り込んでゆけばよいか、その積極的な姿を会場で発表される予定です。また2月17日から新装成ったアベノ近鉄百貨店で「大阪工芸展」が開催される。この会場でも堺伝統工芸師の平川さん他多数が参加され「堺の打刃物」の刃付けの実演を予定している。堺の刃付けはお客様の要望を聞いてから、刃付けをする特徴があり、会場では仮刃付けした商品を用意し、注文に応じて完成させ、また家にある刃物でも刃付けのサービスをされるそうです。デザイナーの年でもあり、堺のワークショップをこのように実施されることは、「堺の刃物」ここにありと、世に示してくれるよい機会であると思っています。また全国の各都市に於いてもデザインの行政の窓口作りに熱心で、数市が実現に努力しています。デザインがすべてではないがデザインなくしては街造りも、企業経営も、生活のうるおいもないのではないかと考えています。大阪でもデザインに関係するデザインセンター構想がいくつかあり、それぞれ大規模な計画でその実現にむけて各プロジェクトが努力中です。大阪中之島でも現代芸術文化センター構想があり、大阪市でも近代美術館計画もあります。このようにデザインをとりまく環境も変わりつつありますので、SADA会員の皆様も堺市と協力されて益々の活躍を期待します。

■第2回FASTEM21堺ファッション・グランプリ報告

桂 智子会員

堺市制100周年の記念すべき年に、そのイベントとして位置づけていただき、第2回FASTEM21堺ファッション・グランプリを迎えたことは大変ラッキーであったと思います。また今回は上海市服装公司高等中等専門学校の職員、学生も参加して頂き、上海の若者達と、堺の若者達の共演のような形で開催されたことは大変意義があり、またやりがいがあったように思います。グランプリの審査には各先生方の出席をお願いし、当協会からも垣村会員が参加されました。特に今回は若者達の創作に重点をおき、自由な発想、エネルギーのぶつかり合い、それによりお互いの感性が磨かれることを期待して、作品作りをさせました。

第2部としてファッションショーを行いました。堺市制100周年ということで、堺100年の歴史をスライドで上映し、そのあと100年の歴史らしきところをファッションショーで見せました。最後の締めくくりは、今後関西国際空港が開港すれば、世界中の人が集まることだと思い、テーマを「ファッションは民俗を超えて」として全体をまとめました。

その後若者達のファッションショーのビデオが上映された。あらためて若者達のエネルギーとその息使いが、堺のファッション界で芽生えているさまを感じました。

■神戸芸術工科大学新設について 小田順子会員

芸術工科大学は、九州、北海道の2校で、3校目として元年4月神戸に開校されることになりました。神戸市は4年程前ファッション都市宣言をしており、デザインに対する関心は高く、産業面でも行政面でも積極的にこれを支えていく気運が高い土地で、教育機関の設置が望まれていました。このような時期に開校する芸術工科大学の学科内容を少し述べますと、本学には3学科があります。環境デザイン、工業デザイン、視覚情報デザインの3学科で、工業デザインの中にプロダクトデザインコース、アパレルデザインコースの2つの分野があり、私はアパレルデザインコースの専任教官として着任します。

本学の特徴は、工業デザインを例に述べますと、今まではものからの発想でデザインしてきたが、今後は見えないことから、見えるものへの発想をすることが大切であり、

例えばイスのデザインを考えるときには、座ることから発想し、どのような環境で、どのような場所で、座るにはどのような姿勢が楽で、綺麗なのかということから発想が生まれるのではないかと考えます。もののデザインを考えるのではなく、ものの使われ方、人の生活の状況までも検討しなければならないと思います。物理、自然科学だけでなく、人文、社会科学までとり入れて総合的に考えなければデザインは出来ないのではないかと考え、カリキュラムが組まれています。このように言葉では充分いつくされていませんが、新しい構想のもとで設立された大学ですので、簡単に紹介させていただきます。（文責 金子誠之助）

村上数物株式会社工場見学(SADS事業報告)

平成元年10月25日午後、泉北高速鉄道梅美木多駅集合。SADA会員11名、原山台敷物団地にSADA賛助会員村上数物株式会社を訪問。社長自らのご案内で工場3ヵ所を見学させていただきました。まず会議室でカーベットの知識等についてオリエンテーションを受け、一同そろって工場へ。シャトルの飛び交う大音響に吃驚しながら大型ウルトン織機の動きぶりにすっかり圧倒されました。がらほ大きくてもその指先のデリケートなこと、長尺物を均質に仕上げするための機械の整備に苦勞するところなど、いつもながら新しい発見の連続でした。フックドラグ（手織絨毯）はピストル型のフック機を使って人の手で糸を基布に刺していくのですが、この糸の刺し具合はまだロボットでは出来ないことだそうです。人間の権威もちょっぴり感じられて楽しい見学会でした。村上社長の益々のご健勝をお祈りいたします。



「住まいのまつりin堺」開催に協賛

平成元年12月5日から11日までじばしんでは市制百周年記念事業の一環として「住まいのまつりin堺」と題して住宅フェアが開催されましたが、SADAでは、同実行委員会の幡谷会長の要請を受けセミナーへの講師派遣と住宅相談コーナーへの相談員の派遣、及び堺デザイン協会賞の設定と援助を決定、実施いたしました。

12月9日じばしん4階V Aルームで行なわれたセミナーには川崎理事長が講師として「インテリアを考える」をテーマに多方面からインテリアの実際をお話しされました。

また8日から11日までの4日間インテリア相談コーナーでは、古本、上野、金子、崎田、北川、館野、山崎、岡村、川崎の9会員が交代でカウンターに座り、延べ30件ほどの相談にあたりました。特に古本さんには、連日にわたり、参加され大活躍でした。御苦勞様でした。

堺デザイン協会賞としては、絵画展の盾を贈りました。



※写真は相談コーナーの古本、川崎、岡村の3会員(右より)

平成元年度デザイン開発指導連絡協議会に参加

平成元年11月15日、大阪赤十字会館中会議室に於いて、近畿通商産業局通商部の主催による上記協議会が開催された。堺デザイン協会からは、川崎理事長、及び岡村事務局長が出席、当協会のデザイン活動状況の報告と、国のデザイン振興策への要望・提言を行った。